【8050(ハチマルゴーマル)問題】

8050 問題は端的にいうと「80 代の親と 50 代の子が社会的に孤立している親子関係の問題」で、2010 年代以降の日本で社会問題化しています。未解決のまま問題が先延ばしにされると 9060 問題に突入します。

80 代の親は健康問題や認知症リスクを抱える、あるいは既に抱えている場合も多く、子が介護を担っている場合も少なくありません。50 代の子は就職氷河期に該当する世代(一般的には 1970 年 4 月 2 日～1982 年 4 月 1 日生まれ、内閣府定義では 1974 年から 1983 年生まれ)で、1980 年代のいじめ・不登校問題、冷戦終結によるグローバル化・低価格競争の激化、バブル崩壊後の新卒雇用調整・若年失業率増加など時代の波に翻弄され、ロストジェネレーションと呼ばれることもあります。就職活動に失敗した頃、行政からは「自己責任」「親が面倒を見るべき」と切り捨てられ、その後の孤立についても社会風潮から「努力不足」「無気力」「怠け者」「すねかじり」など「若者の側に問題がある」かのような論調を押し付けられ、ニート(NEET: Not in Education, Employment or Training)(就学・就労も職業訓練も受けていない)のまま就職活動自体を断念するようになり、50 代を迎えたと考えられます。

80 代の親の扶養を受け生き延びる 50 代の子は、病気や認知症の親の面倒を見る役割によって生かされ、親も子も「必要とされることを必要とする生き方」

すなわち共依存状態となります。家族が外部とつながりを持たない独立系となり、社会的孤立が進みます。ネグレクト・孤立死・心中・死体遺棄などの顛末が考えられます。

自分もこれまで数多の 8050 問題と向き合ってきました。でも肌感覚として全く足りていません。まだまだ潜在的な 8050 問題が当地にもあるはずです。80 代の親でも 50 代の子でも構いません。8050 問題を察知した場合は役場・保健所・地域包括支援センターにまず連絡を入れて下さい。個々の事例の踏み込んだ相談には(広域紋別病院精神科・認知症疾患医療センターとして)自分が真摯に対応させて頂きます。